

道元とルターにおける「信」について

笠 井 貞

道元禪師とマルティン・ルター（1483—1526）とは、時・処・位・思想系統などが異なるが、共に「信」を重視して居る。そこで信を中心にして両者を比較し、類似性と異質性を考察しよう。

道元の仏法は「信」を基本にして居る。それ故に「修行仏道者、先須信仏道。信仏道者、須信自己本在道中不迷惑、不妄想、不顛倒、無増減、無悞謬也。生如是信、明如是道、依而行之、乃学道之本基也。」¹と言ひ、「仏言、不信之人猶如破瓶。然則不信仏法之衆生、更不可為仏法之器也。仏言、仏法大海信為能入。明知、不信之衆生、未可共住者歟。」²と説く。また仏道の真髄を得、法を伝えることは、必ず至誠・信心によるのであり、その至誠も信心も、外から来た形跡は無く、内から出るのでもない。重法輕身し、般若を尊重せよと言う。更に、諸仏の境界は不可思議で、心識の及ぶべきにあらず、況や不信劣智の者には知られない。唯、正信の大機だけが悟れるのであり、不信の人は、教えても受け難いが故に、心に

正信が起れば、修行し參学すべきであり、正信が起らなければ、暫く時期を待つべきであると主張する。正信により修行すれば、時・処や利鈍に関係なく、皆、得道すると言う。所謂「信根」は、自己・他己・自己強為・自己結構・他牽挽・自己規矩などではない。渾身似信を信と称するのである。渾身心に信現成する。この信が、身心の全体を貫き、法界に遍満するのである。信即仏果位、仏果位即信である。信と仏果は、自他共に同時去来であり、信現成が仏祖現成なのである。こうして、道元に於ては、仏信一如、仏法即信なのである。結局、道元に於ける信とは、仏道に入るための必要条件、悟りを得る充分条件なのである。信・信解により、見仏眼が生じ、仏を見る功德が成就すると言うのである。

所で道元は、信・信心を、菩提心・無上心・道心などと換言して居ると見てよいと思う。元来、菩提心と信・信心とは同じであるが故に。菩提心または道心は、仏道実践の基本である。道元は次のように述べて居る。菩提心をおこすのは、

質多心(慮知心)による。しかし慮知心即菩提心ではなく、この慮知心の作用として菩提心が成立する。菩提心・道心の必須条件は、観無常心である。無常を深く観ずる時、吾我名利の念が起らない。たとえ権実の妙典を読み、顕密の教籍を伝えても、名利の邪念を抛たなければ、菩提心とは言えない。吾我の念あれば、名利の念起るが故に、唯、吾我を忘れての修行が、菩提心に契うことになる。吾我・貪欲を離れるのが仏道であるとする。自未得度先度他の心を起すのを初発菩提心と言う。初発菩提心の後、更に許多の諸仏に逢い、見仏聞法し、更に菩提心をおこす。そして畢竟、菩提成就する。菩提成就即ち阿耨多羅三藐三菩提と初発菩提心とを格量すれば、劫火と螢火のような差があるが、自未得度先度他の心を起せば、二無別である。衆生を利益するとは、衆生に自未得度先度他の心を起させることである。自未得度先度他の心を起させる力によつて、自己が仏に成ろうと思つてはならない。たとえ成仏の功德熟しても、尚、衆生の成仏得道に回向するのである。菩提心は一切に波及するのであり、菩提心による施与は、皆、菩提心の聞語話・活潑潑である。一刹那、発菩提心すれば、万法は皆、増上縁となる。発心得道、皆、刹那生滅することによつてなのである。刹那生滅の理を凡夫は覺知しないが故に、菩提心をおこさず、菩提心をおこさないが故に仏法を信ぜず、仏法を信じないが故に、刹那生滅の理を信

じないのである。若し如來の正法眼藏涅槃妙心を明らかにせば、必ずこの刹那生滅の道理を信するのである。刹那生滅、流転捷疾にありながら、自未得度先度他の菩提心をおこせば、久遠の寿命、忽ちに現在前するのである。菩提心を守護することにより、阿耨多羅三藐三菩提を得て、常樂我淨の涅槃が成就される。菩提心を退転するのは、多くは大師に逢わないことによる。正師に逢い、正法を聞かなければ、因果・解脱・三宝・三世などの諸法を撥無し、五欲に貪著して、菩提の功德を失うのである。誠心を尽して懺悔する時、仏祖の冥助あり、我を離れ、仏と不二となつて清淨になり、罪惡の根源が銷殞する。これが一色の正修行・正信心・正信心である。無礙の清淨の信が、無我の自己の行として生長する。このような淨信が、一度現われる時、凡夫が仏に転ぜられる。即ち信現成が仏祖現成である。さて信の対象は三宝である。仏法僧三宝を恭敬するのが、印度以来の仏法である。三宝に帰依すれば、自己と三宝との対立は消えて、感應道交する。そこに帰依三宝の功德が成就する。それは生生世世、在在処処に増長し、積功累徳し、阿耨多羅三藐三菩提を成就するのである。帰依三宝は、淨信を專一にすることが前提になる。帰依三宝により、身心は刹那生滅であるにも拘らず、法身必ず長養して、菩提を成就するのである。

ルター (D. Martin Luthers Werke; Kritische Gesamtausgabe.

Weimarer Ausgabe) に於ける「信」とは何か。理性や経験によつて証明できる智慧ではなく、まだ見て居ない事実を確信することである。見ることに、知ることのできない、隠された神 (Deus absconditus) を信じ仰ぐことである。神の言葉を承認すること、神に信頼すること (credulitas in Deum) とは同一である。人間は、神を持つのではなく、絶えず求め、繰返し求めなければならない。神への道に於て立止ることは許されないが故に。人は、神の前に於て罪人であると告白し、心を謙遜にして引下がつて、神を信ずることにより義とされる、と言う。キリストの犠牲によつて、人間を、信者・聖者とし、罪・死・悪魔から解放し、天国に置くことが、ルター

の言う、福音 (Evangelium) であり、これを人間は、信仰で把握しなければならないのである。感覚も知性も徳も意志も一切捕えられて、神の裸の言葉に従うこと、自己が行くよりも、導かれ、行かされると言うこと、これが信仰の栄光である。信仰とは、神の言葉を聴くこと、神の前に立つことを許され、交わりに入れられることである。真の信仰により、神を恐れ、愛し、一切の行為に於て固く信頼し、一切の事を全く純粹に神に委ねなければならない。信仰は、直ちに愛 (Liebe)・平和 (Frieden)・喜び (Freude)・希望 (Hoffnung) を齎す。人を純粹に且つ神に相応しい者にするのは、唯、信仰だけであるが故に、信じ、確信すれば、恩恵 (Gratia) を獲

得する。信仰は義認を与える恩恵なのである。信仰は、人間の心に自然に生ずるものではなく、人間の内に於ける神の業であるが故に、心と霊と精神と一切の能力とに於て、人間を全く別人に新生させ、信仰と聖霊とを齎すのである。

義に至る信仰 (fides ad Iustitiam) は、告白 (confessio) にまで到らなければ、義の目的即ち救いに到らない。告白は信仰の顯著な業であり、信仰によつて人間は、自己を否定して、神を告白し、自己を肯定する以前に生命も一切のものも否定するように、否定し告白する。即ち人間は、神への告白と自己否定の内に死ぬのである。その告白の時、人間は自己を捨てて、神と神への吾白だけが確立すると言う。要するにルターに於ける信仰とは、神の前に於ける自己否定、或は謙遜である。謙遜 (humilitas) が信仰であり、傲慢 (superbia) が不信なのである。結局、信仰とは、人間の、神への謙遜な服従で、不信とは、人間が、神の言葉を真理と認めず、吾我を貪愛し、神に対し傲慢な不信と反抗を行なうことである。信仰と謙遜により、人間の内に神が満ちるために、人間は全く無 (nihil) となり、自己を空虚にしなければならない。ルターは、神以外に全く善を認めず、一切の善を神に帰するのである。罪の本質は、貪欲 (concupiscentia)・我意 (sensus proprius) である。人間は、自己の内に全く疚しいことが無くても、罪人であることを信じなければならない。信仰は、心を

改造し、神の意志の認識へ導くのである。罪の赦免は、神によつて準備され、信仰によつてだけ人間に与えられる。罪の赦免 (remissio) と罪の除去 (ablatio) とは異なる。ルター

は、パウロに従つて、罪が人間から除去されるのではなくて、人間が罪から浄め去られるのであると主張する。死に於て罪は完全に除去されるが、信仰のある所、罪でさえ罪でなくなる。神は義人を義とするのではなくて、罪人を義とするのである。人は罪人であり、同時に義人なのである。良心が、信仰によつて清浄・平穩にされるので、罪の赦免の喜びのために、罪を恐れなくなるのである。信仰は、一切の善行為の第一原理である。信仰こそが、一切の行為を善いもの、神の心に適うもの、価値あるものにする。ルターは、信仰だけ、と主張したが、善行を禁じて居るのではなくて、信仰に基づく正しい善行を強調して居るのである。神の心に適うと言う確信が、人の心にあれば、たとえ一本の麦藁を拾い上げるような些細なことであつても、その行為は善であると説いて居る。激しい祈り、厳しい修行・訓練は、この世の最期の日まで続けなければならないと言う。さてルターにとつて最も重要なものは、信仰自体よりも、信仰の対象である三位一体の神なのである。信仰とは、天地を創造し、一切の被造物を支配する唯一神に敢えて信頼を置くことなのである。神は、神自身を、キリストの活動の内に啓示するのであり、人である

キリストは真の神である。

道元もルターも信を重視して居り、表面的類似性が若干見られる。しかし仏教の系譜の道元とキリスト教の系譜のルター、両者の思想形態の差異は明瞭に認められる。道元の根本体験は、無常観である。無常、刹那生滅の故に、仏法を理論的に信ずることができ、実践的に信すべきなのである。それに対して、ルターの根本体験は、罪惡観である。恐るべき神、一切を創造し、支配する、隠された神に、無条件に、絶対的に服従すべきであると言う。信仰によつてだけ、神の怒り、裁きの裏に、永遠で、確かな神の愛を認めることができるのである。「法」中心の道元に於て、仏道を信ずるとは、自己が仏法の中に居ること、自己が仏法そのものであることを確信することである。他方、「神」中心のルターに於ては、信とは、唯一神を信じ仰ぐこと、恩恵の神に感謝し、信頼し、服従することであり、その服従も、人間のためでなく、唯、神のためである。

要するに道元が、信・信心・信解などの語によつて表現するのは、サンスクリット語の śraddhā と adhimukti の両義を含み、仏と同質・同根である人間が、信により仏(覺者)と成ることである。これに対し、ルターの信 (ラテン語の fides・ドイツ語の Glaube) は、人間とは全く異質の唯一神への信仰により、義とされることである。